

都小 社研 会報

発行所
東京都小学校社会科研究会
東京都世田谷区等々力7-26-1
発行人 月岡正明
編集人 赤尾眞司

名古屋大会の成果を生かす

東京都小学校社会科研究会副会長
葛飾区立花の木小学校長

宇田川 嘉一



学習指導要領の告示を控えた本年、十月二十日・二十一日の両日、第五十四回全国小学校社会科研究協議会研究大会・名古屋大会が開催されました。大会主題「ともに生き合う社会を目指す子どもたちの社会科学習」を掲げ、市内三会場にて会場別研究会が開催されました。今回の研究発表から私は多くのことを学ぶことができました。

○自分の生活とのつながりより、よりよい社会を目指す必要性が感じられる。
○人々が協力して社会をよりよくしようとしていることが分かる。
○よりよい社会の実現について考えることができる。
次に「子どもが社会への関わりを見つめる学習過程」として、三つの段階で構成しています。
○社会を見つめる段階：学習問題を設定し予想を話し合い追究のめあてや方法を決める。
○社会が分かる段階：各自の調べたことを基に学習問題について話し合い社会的現象の意味や役割を考える。
○社会に関わる段階：学習を振り返り、協働におけるよさや課題を見いだし、自分の考え

の変容を振り返り、今後の社会について考える。さらに、学習活動については、「子どもが社会への理解を確かなものにする学習活動」とし「振り返り」に着目しています。
○一人一人が考えの深まりを自覚できるように、分かったことや考えたことを振り返る。
○学級の皆で学習の見直しをもつことができるように、追究内容やめあてを振り返る。
この研究理論は子どもたちの学ぶ姿に表れていました。
本年度、都小社研では研究副主題を「社会的現象の見方・考え方を用い、社会認識を深める学習を通して」と変更しました。
現在、つかむ・調べる段階では、人々の工夫・願い・努力等から事実相互・立場相互の関係で見ることとしています。また、まとめる・ふかめる段階では、人々の生活と関連づけて考えることとしています。さらに社会認識を深めるために、根拠や理由を明確にして子どもが自分の考えを論理的に説明できるようにしようと考えています。
あらためて名古屋大会の成果から学び、私たちの理論をより明確にしていきたいと思います。

名古屋大会報告

全国小学校社会科研究協議会事務局長
清瀬市立清瀬第八小学校校長

西脇裕高

第五十四回全小社研名古屋大会は、十月二十日(木)二十一日(金)に「ともに生き合う社会を目指す子どもたちの社会科学習」を主眼から参画を志向して」を主題として名古屋市で開催されました。
第一日目の全体会は名古屋市教育センターで、二日目の会場別研究会は市内の三会場(白鳥小・御器所小・ほのか小)で開催されました。
全体会の基調提案では、研究主題に迫る子どもたちを育てるため、「子どもが社会とつながる教材化」「子どもが社会への関わりを見つめる学習過程」「子どもが社会への理解を確かなものにする学習活動」の開発と工夫に取り組んだこと。そして、「協働」への気付きから「参画」へと子どもの認識と実践意欲が広がったことについて、実践を基に分かりやすく提案されました。

からの新指導要領で求められる力に十分位置付けていることと、その意義について指導講評をいただきました。
記念講演では、脳科学者である茂木健一郎先生から「脳科学と学び」の演題で楽しく示唆に富んだご講演をいただきました。
二日目の会場別研究会では、三会場ともに大会主題を受けた授業が、全国各地から足を運んだ多数の参観者の、熱い眼差しのもと展開されました。名古屋ならではの教材による体験的な学びや、選択・判断の場を通して、自分の思いや考えを意欲的に話し合う活動等、子どもたちの生き生きとした姿から、多くのことを得ることができた授業でした。学年別授業研究会、学年初級研究会でも、充実した活発な協議が行われました。
開催地名古屋市の現職の先生方とOBの皆様、教育行政の協力体制による周到な準備やきめ細やかな対応にあらためて敬意を表します

特集

全小社研・名古屋大会に学ぶ

第一会場
名古屋市立白鳥小学校

一 はじめに

明治六年開校の白鳥小学校は、熱田神宮の西に位置し、地域には多くの歴史遺産がある。平成二十五年からは、タブレットパソコンや電子黒板などICT機器の活用を研究している。

二 公開授業

白鳥小学校では、特別支援学校を含む全十五学級で行った。

第三学年では、「のこしたいもの伝えたいもの」で熱田まつり、第四学年では、「きょう土を開く」で名古屋南部の開発、第五学年では、「自然災害を防ぐ」で東海地震・南海トラフ巨大地震等への対応、第六学年では、「新しい日本 平和な日本へ」で二〇二〇年の東京オリンピックを教材化した公開授業を行った。

第四学年では、名古屋南部の開発に尽力した江戸時代の「津金文左衛門」、明治の「奥田助七郎」、昭和の「前田一三」の異なる時代の三人の先人の業績を「行動(何をして)」「結果(どうなった)」という二つの視点から

調べた。本時では、三人に共通する思いや願いを考える授業(一組)と、子どもたちが生きていくこれからの名古屋南部の未来を考える授業(二組)が公開された。どちらの学級の子どもも自分の意見をしっかりと述べながら学習に取り組んでいた。

三 全体会

1 基調提案

白鳥小学校がこれまで大切にしてきた「地域の特色を生かす」「ともに学び合う」「ICT機器の有効活用」を生かしながら社会科の充実のための取組について三点から説明がされた。

①子どもが社会とつながる教材化(白鳥・名古屋に関する素材の教材化)

②一人一人が考えの深まりを自覚する振り返り(テーマを設定した毎時間の振り返り)

③学級のみならず見通しをもつ振り返り(プロジェクトシート・学習のあしあとの活用)

2 指導講演

国士館大学子どもスポーツ教育学科

教授 北 俊夫先生

白鳥小の授業実践について、

・よりよい社会を考えるという視点から教材化され、社会科の役割を意識した実践であった。

・社会と自分との結びつきを考えさせ、確かな社会認識を育む実践であった。

・子ども同士の質の高いかかわり合いを通して、社会参画の基礎を育む実践であった。

・学習の見通しをもち、振り返りを行うことで、新たな課題を見つめるなど、これからの社会を考える実践であった。の四点から講評された。

また、次期学習指導要領について、①社会に開かれた教育課程、②カリキュラム・マネジメント、③見方・考え方、④アクティブラーニングの四つの総則のキーワードについて、社会科の果たす役割等についても示唆いただいた。

四 学年別授業研究(四年)

協議会では、単元を通して「プロジェクトシート」の活用の仕方、子どもたちの「振り返りシート」についての指導の仕方、時間的に異なる三人の先人を取り上げたことよき、ビデオで取り上げたゲストティーチャーの活用の仕方や効果などについて

活発な協議が行われた。

講師の先生からは、「地域素材の教材化が子どもたちの主体的な学びを引き出していた。」等のご指導をいただいた。

五 学年別課題研究会(四年B)

鳥取県からは、倉吉市にある「天神野台地の開拓」における、実際に仕かけるフィールド・ワーク、もっこ等を使った模擬作業体験、立体地図の活用等の有効性について提案された。

名古屋からは、子どもたちの疑問の解決に重要な事実を一人一人が「サークル型関連図」にまとめ、それぞれの相互関係をグループで「ビッグサークル型関連図」に表す指導法が提案された。

六 終わりに

五年生では、ICT機器のタブレットパソコンが効果的に活用されていた。また各教室の後ろに掲示された「プロジェクトシート」「学習のあしあと」からは、白鳥小学校の子どもたちの意欲的な学びの様子が伝わるとともに、授業での子どもたちの姿から研究の充実を感じた。

世田谷区立武蔵台小学校

校長 諸角 哲男

第二会場
名古屋市立御器所小学校

一 はじめに

本校は、熱田神宮に土器を奉納したことに由来する学校ながらもわかるように、歴史のある地域に立地し、平成十六年にも本大会の会場校にもなった研究の伝統も併せ持つ学校である。

二 公開授業

全学級で、社会科・生活科の授業公開が行われた。第三学年は「残そう 御器所にある古いもの」御器所八幡宮の祭りに関わる人の思いに触れて、第四学年は「交通事故や事件からくらしを守るくめさせ 事故や事件のないわたしたちの御器所」、第五学年は「自然災害を防ぐく地震災害を取り上げてく」、第六学年「わたしたちの願いを実現する政治く名古屋本丸御殿の復元を見つめてく」の授業が行われた。

どの単元においても、学習の振り返りについて数値を用いて表し、自身の学びの深まりを自覚する活動が組まれていた。

第六学年では、現在進行中である名古屋城本丸御殿の復元事業を教材化し、この事業が市民

の願により成し遂げられた過程を追究することで、市政と自分との関わりについて考え、参画する学習が行われていた。

三 全体会

1 基調提案

大会主題と副主題についての説明に続き、副主題である協働から参画を志向する姿を引き出す工夫について具体的な事例を基に提案された。

① 社会とつながる教材化

子どもが社会との関わりを見つめる学習過程

② 子どもが社会への理解を確かなものにする学習活動

かなものにする学習活動

③ 指導講評

國學院大学人間開発学部 教授 安野 功先生

◎平成二十五年度から教材開発、子ども主体の授業づくり、振り返りを重視した授業づくりの三年間の積み重ねの上に、今年度の研究がなされていることは重要である。この研究において何が育ったのか、目標、内容に照らして検討してほしい。

◎手立てとして提案された「自分の認識の状態を数値化する活動」は、自分と他者との違いを

意識させることで、相手のことをより知りたくなる気持ちを醸成し、それが話し合い活動の必然性につながっている。

◎参画については、教師側の意識改革が必要である。次回の学習指導要領の改定においても時数は不変である。増築はできないので間取りを工夫する発想で、プロセスをスリム化してほしい。

◎発言は、既習事項を根拠にするべきである。既習を生かすためには、いつでも見られるノートや掲示物が有効である。教師は、常に児童の根拠がどこにあるかを自身に問う必要がある。

四 学年別授業研究会

第六学年の授業研究会では、基調提案で示された三点の工夫に基づいた実践提案がされた。

名古屋城本丸御殿復元の教材としての価値や課題、働きメーターと発問の関係、企業を政治の一部を取り扱うことの意義、参画についてのとらえ方や授業で見られた具体的な姿について協議された。

講師の先生からは、本教材について、過程や実物が実際に見られる、市民の願いが実現している、名古屋への郷土愛を育む

社会とつながる、の四点から価値があることを指導いただいた。

五 学年別課題研究会

第五学年A会場において、東京都からは、水産業の単元において深める段階で近大マグロを扱った実践が報告された。第一学習問題と予想とのつながり及び調べる内容との関係、深める段階における第二学習問題の設定について本質的な協議が成された。

北九州市からは、地域教材である公害を克服した取組を活用した実践が報告された。地域の教材を扱うことによるよさと課題について、自分事のできる点と国土学習にどうつなげるか等から多面的に議論された。

六 終わりに

児童は自分の考えをしっかりともち、その根拠とする資料も明確にして意見表明をしていた。意見交換により、互いに学びを深めている姿が非常に印象的であった。

足立区立中川小学校 校長 加藤 雅弘

第三会場

名古屋市中立ほのか小学校

一 はじめに

平成十四年に開設された名古屋市の統合校で、本陣(ほんじん)小、則武(のりたけ)小、亀島(かめじま)小の頭文字をとってほのか小学校と名付けられた。通常の学級が十三学級、特別支援学級が二学級の学校である。リニア中央新幹線の開通により、国際的・広域的な交流地点としてふさわしいまちづくりが期待されている名古屋駅周辺地区にある。平成二十六年度より、学び合いの授業づくりを通して、友達と協力して人間関係をよりよく構築しながら様々な活動に積極的に参画することが、「ともに生き合う社会」をつくる資質・能力の基礎を培うとして、研究を推進してきた。

二 公開授業

地域にあるあん工場「イワノヤ」のあんづくりへの思いをキャッチコピーにする活動をした第三学年、名古屋駅の開発に尽くした吉田緑在を教材化した第四学年、トヨタの自動車づくりが消費者のニーズに応えているかドリカムメーターという尺度法を用いた話し合い活動を展

開した第五学年、市民としての願いの実現を自らの立場を明確にして話し合う活動を展開した第六学年など、地域素材の教材化と自分の学習への振り返りを大切にした授業が公開された。

三 全体会

1 基調提案

大会主題である「ともに生き合う社会の実現」のためには、児童一人一人が自立した個としての自覚を深め、協働の学びから、そのよさや課題を発見し、その解決に向けて社会への参画意識を高めていくことが必要である。そのために地域の素材を積極的に教材化し、学習過程や学習活動を工夫しながら、自分と社会との関わりを確かめ、よりよい社会の実現について考えることのできる授業展開が必要であると提案された。

2 指導講評

早稲田大学 教授 藤井 千春先生

中学年の授業では、児童がお互いのつばやきに刺激し合っていた。高学年では、児童がお互いを支え合いながら、社会の中で生きていこうとする意欲が感じられた。そして教師には、児童と真剣に向き合う姿勢が見ら

れた。社会科研究を深めるには、地域教材の開発が重要となる。

地域教材の学習を通して児童は、地域の一員としての自覚を深め、地域の中で生きていくという安心感や地域とのつながりのなかで生きていくという実感をもつことができる。また、授業における児童のつばやきを大切にしたい。つばやきをつなげ、広げ、共有することで、つばやきがやがて問いとなり、考えや判断につながっていく。

四 学年別授業研究(4年)

名古屋駅の開発に貢献した吉田緑在という地域の人物を教材化し、名古屋駅の開発に伴うまちづくりの変容を学習してきた児童は、関係図や年表などのワークシートによる個人探究のもとに、グループや全体の話し合い活動における意見交換を通して、自分の学習を確かめ、さらに、吉田緑在の名古屋駅の開発の学習のもとに、未来の名古屋駅について、自分の考えを発表させる授業を展開したとの報告があった。参加者からは、吉田緑在の願いと未来の名古屋駅の発展との関連性や古い街並みの保存との関連などについて質問が寄せられた。

五 学年別課題研究(4年B)

島根県から、地域にある松江町今田井堰を作った井上小平次の教材開発とその授業展開についての発表があった。付箋などを活用し、児童の問いをつなげて、学習を深める工夫ができたことと成果が報告された。

つづいて、愛知県から、リサイクルに焦点をあてたごみ問題の授業展開について発表があった。ゲストティーチャーを効果的に活用し、リサイクルについて調べたことを具体的に聞いて確かめる場を設定して、社会への参画意識を高めるように工夫した実践であった。いろいろな立場の方に話を聞くことで、参画への意欲を高めるよい契機となったと報告された。

六 終わりに

ともに生き合う社会を目指す社会科学習、協働から参画を志向するという大会主題を意識した授業が、各学年で展開されていた。特に、自分の学習の成果を、社会への参画意識にまで高めようとする実践に、これからの社会科教育の果たす使命を強く感じた第三会場であった。

町田市立藤の台小学校

校長 三好 浩一

名古屋大会・課題別提案(東京) 第二会場 学年別課題研究 第五学年 分科会 研究主題「よりよい社会について考えようとする子供の育成」

「自分と社会とのかわりを実感し、考えを深める指導の工夫」

提案した単元名

「水産業のさかんな地域」

◆提案

世界有数の水産物消費国である我が国であるが、その背景には水産物を確保するために水産業で働く人々の工夫や努力があることを調べるを通して、水産業について理解していく。

その一方で、我が国の水産業が抱えている課題について考えていくことで、これからの水産業の在り方について考えようとする子供を目指して、教材開発と指導の工夫を行い実践した。

(一) 教材開発

①社会と自分たちの生活が密接に関わっていることに気付かせることをねらった生活のかかわりを実感できる教材

②社会をよくしようとする努力している人の姿を見せることで、社会の発展への思いを高めることをねらった教材

③これからの社会について考え、社会参画への意欲や態度を育

むことをねらった教材

(二) 指導の工夫

①矛盾する2つの資料を提示し、予想を話し合うことで問題意識を高める活動

②グループでの話し合いや意見交換を活性化するためにホワイトボードを使う活動

(三) 「ふかめる」段階における教材と活動の工夫

近畿大学のマグロ完全養殖について取り上げた。天然クロマグロが絶滅危惧種となり、マグロが獲れなくなるのではないかとという危機的状況を解決しよう

近畿大学が立ち上がりマグロの水産業の諸問題を改善・解決する取組について調べた。クロマグロの完全養殖は世界初の技術であり、それを成し遂げるまでの工夫や努力を見せることによ



り、これからの水産業について考えるきっかけとした。また、近大マグロ養殖のプロジェクトに関わる人々の思いや願いを知ること、これからの水産業の在り方について考えを深めることにつながった。そこで一人一人が「これからの水産業はどうあるべきか」というテーマで意見文を書いた。子供からは、「未来の日本人が水産物を食べられるようにすることが大切だと思う。だからこそ、水産業のあらゆる問題に国全体が目を向けることが大事。」などの意見が見られ、これからの水産業を深く考えることができたと同時に、社会の発展に対する関心を高めることができた。

◆協議

○矛盾を感じさせる資料を基に、予想から学習問題をつくるという過程は、重要な視点であると思うが、子供から出た予想は、その後の学習につながるものであったか。

・確かに、子供たちの予想がしっかりつながるかと言ったら難しいが、授業の実際は、スムーズにいった。

○あえて学習問題Ⅱとしたのは、どのような意図があるのか。

・今まで学習問題Ⅱという表記について部会で議論してきた。単元を貫くという意味においては、適切ではないとも考えているが、現在では、便宜的にⅡという表記を用いている。今後検討が必要であると考えている。

○どのようにふかめる段階を設定したのか。

・子供の問題意識を基に設定した。具体的には、第7時の子供のつぼやき「つくり育てる漁業の他の取り組みはどのようになっているのだろうか。」を中心としている。

○なぜ、近大マグロを教材化したか。ふかめる段階で扱うのなら、単元の中心として扱ったカツオに関する新しい取組を教材として開発したほうがよかつたのではないか。

・まとめる段階で、子供たちから、養殖漁業や栽培漁業以外にの取組を調べてみたい、という意見が出た。その問題意識を生かした形で近大マグロを教材化した。子供たちから近大マグロの話が上がったのも教材化した理由の一つである。

杉並区立高井戸第二小学校

教諭 寺本 大一

第五十四回全小社研
名古屋大会巡検

天下分け目の地、奥の細道終焉の地
岐阜・大垣・関ヶ原を訪ねて

今回の巡検のテーマは、「松尾芭蕉」と、「天下統一」であったでしょう。

大会二日目終了後、芭蕉がその名付け親という長良川温泉、十八楼をあとに、月岡正明会長をはじめ顧問の先生方を含む参加者十五名は、濃尾平野を一望の下に見る名城「岐阜城」を見学し、その後、「墨俣城」を車窓から見た後、いよいよ「大垣」の地に入ります。大垣は、芭蕉が「奥の細道」の旅を終えた地であることから、市民レベルで俳諧についてさまざまな取組の見られる町でもあります。また、大垣は関ヶ原の戦いの際に、当初、西軍が東軍を迎え撃つ予定の地でもありました。

天下分け目の地「関ヶ原」では、有名な白髭のポランテアガイドさんの案内で①家康陣馬野公園（床几場：首実検を行った地）②笹尾山（石田三成陣跡）③大谷吉継墓所と回りました。①の地は、移動中にバスを停めて立ち寄った「桃配山」から、家康が最終的に陣を進めた場所

です。当日の家康のはやる気持ちがかかるような気がします。

②の笹尾山は、関ヶ原の地を一望できる絶好の位置にあります。陣を進める家康の軍勢も視界に入ったことでしょう。

最後の③の地では、感動的なエピソードを聞くことができました。義を重んじ、情けに厚いことと有名な大谷吉継ですが、関ヶ原の戦いの際、自分の陣地を置くことになったその地の民を大切にすることから、以来四百年もの長きにわたり、供花が絶えたことはないそうです。

最後に、ガイドさんから教えていただいた東西両軍のリーダーが大切にしていた言葉をご紹介します。三成は『大一大万大吉（だいいちだいまんだいきち）』、家康は『厭離穢土欣求浄土（おんりえどごんぐじょうど）』です。

どちらの言葉も表現は違えど、太平の世を願い、戦をこれ以上、続けまいとする強い気持ちが伝わってくる言葉です。対照的なこの二人の大將にあっても、戦乱の世を終わらせるとい願いは、奇しくも一致しているところだったのです。

町田市立本町田東小学校

校長 土田 昇

都小社研

今後の研究授業
及び研究発表会について

東京都立杉並区立池袋第三小学校 校長 吉藤 玲子

平成二十八年度の研究主題は、

「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う社会科教育」社会的現象の見方・考え方を用い社会認識を深める学習を通して」です。この研究主題の下、①「見方・考え方」の追究の視点を生かした問いの設定②社会的現象の特色や意味を多角的に考察する力の育成③資質能力を育む学習過程の工夫に重点を置き、実践授業を通して研究を進めています。各学年部会の研究授業の経過は以下の通りです。

- ・ 七月十二日 多摩市立多摩第二小 池田豊一 「多摩市のようす」
- ・ 十月二十五日 世田谷区立三軒茶屋小 和知菜穂子 「わたしたちのくらしと商店街」
- ・ 九月二十九日 豊島区立池袋第三小 藤田 茜 「「み」のしまつと再利用」

・ 十月三十一日

国立市立国立第三小 友廣 幸樹 「地震からくらしを守る人々」

・ 五月生部会

・ 九月二十九日

中野区立古田小 笠原 駿 「これからの食料生産」

・ 十二月十三日

杉並区立和泉学園新泉和泉小 三浦 哲 「防災とテレビ局」

・ 六年生部会

・ 六月二十八日

足立区立千寿小 幸地 裕助 「全国統一への動き」

・ 十月三十一日

昭島市立武蔵野小 内藤 良英 「条約改正」

①日時

平成二十九年二月二十四日

午後一時四十五分～四時四十五分

②場所 葛飾区立柴又小学校

(駒野真理子校長)

③時程

・ 一時四十五分～公開授業

・ 二時四十五分～全体会

④指導・講評

文部科学省

初等中等教育局視学官

澤井 陽介 先生

授業に役立つ夏季研修会を終えて

東京都立清見小学校 清水 一臣

今年度は左記の五つの現地研修会を実施しました。

①ガス関連施設

七月二十一日(木)

- ・東京ガス扇島LNG基地
- ・東京ガス ガスの科学館

②製鉄関連施設

七月二十二日(金)

- ・JFEスチール東日本製鉄所
- ・JFEスチール関連会社
- リサイクル施設

③製紙関連施設

七月二十六日(火)

- ・日本製紙クレシア開成工場
- (ティッシュ工場)
- ・小田原城歴史見聞館

④酪農・乳業施設

七月二十八日(木)

- ・松下牧場 ・ミルクランド
- ・あさぎりフードパーク

⑤石油精製工場・東京港海事施設

七月二十九日(金)

- ・コスモ石油千葉製油所
- ・東京港海事施設

雨で涼しいガス施設見学会に参加して

武蔵野市立井之頭小学校 吉田 正美

東京湾の川崎近くの埋立地に東京ガス扇島LNG基地があります。オーストラリア、カタール、マレーシア、ロシア、インドネシアなどで天然ガスを採掘し、マイナス百六十三度の液体にして船で運ばれています。それに海水を掛けて気化させ、臭いを付けて家庭や工場へ送っています。

扇島パワーステーションを作り、電力自由化に対応して、最大二百万KWを一般家庭二百万軒に天然ガス発電で対応しています。モニターがどこから見られる会議室で、扇島の説明を受けました。午後から、豊洲のガスの科学館を見学しました。一階の展示室は、「暮らしを支えるエネルギーガスを知る。」二階は、「エネルギー環境と私たちの暮らしとの関わりを理解する。」というテーマでした。見て感じて、触れて考え、体験やゲーム感覚が多いので楽しく学べました。

「暮らしを支えるエネルギーガスを知る。」二階は、「エネルギー環境と私たちの暮らしとの関わりを理解する。」というテーマでした。見て感じて、触れて考え、体験やゲーム感覚が多いので楽しく学べました。

「暮らしを支えるエネルギーガスを知る。」二階は、「エネルギー環境と私たちの暮らしとの関わりを理解する。」というテーマでした。見て感じて、触れて考え、体験やゲーム感覚が多いので楽しく学べました。

製鉄所見学会に参加して

中野区立向台小学校 林 新吾

JFEスチール東日本製鉄所の世界は実際に足を運んでみて、異次元の世界の様に感じました。作業員さんの頭の上には1000℃や2000℃という桁外れの溶けた鉄がありました。また、ものすごい量の溶けた鉄を炉に移す転炉という作業で

は、銑鉄から出る火花は小爆発が起こったかと思うほどの光景でした。これらの迫力や感動はなかなか言葉では表すのは難しいのですが、子供たちに少しでも伝えられるように努めたいと思います。

また、ゴミ処理場が敷地内に併設されており、民間としての苦労や工夫について話して頂きました。利益を出しながら公共と同質のサービスを提供するのは並々ならぬ企業努力が必要だと感じました。「命を味わう夏」

酪農体験会に参加して

八王子市立船田小学校 岡本 祥歩

今回初めて酪農教育研修に参加をしました。先輩の先生に声をかけて頂いたこと、牛乳も、牛肉も、乳製品も大好きだったことがきっかけでした。

行きのバスでは國分先生による「牛クイズ」がありました。その中でも驚きだったのは、牛は生まれてすぐに親から引き離されてしまうということです。家畜として、人間のために生まれてくることの意味を考えさせられました。酪農体験では、牛のお世話や、牛舎の中を見学させていただきました。間近で見る牛は、大きい！温かい！可愛い！そして、体験を通して、牛の命の偉大さ、酪農の苦労を感じました。普段何気なく言っている「いただきます。」に、どれだけの命が関わっているのかを、子供たちにも知ってもらいたいと思いました。

製紙工場見学会に参加して

調布市立井之頭小学校 竹中 円

「クリネックス」で有名な日本製紙クレシア開成工場を見学した。輸入パルプの溶解から、配合乾燥、切断、包装までを巨大な工場で大規模機械を使って行っていた。機械音が響く蒸し暑い中、働く方々が細心の注意を払って私たちの生活に欠かせないトイレットペーパーやティッシュペーパーを作っていることがわかった。どんな質問にも答えて下さるところにもプロフェッショナルぶりを感じた。質疑応答では教える側が押さえておくべき点も学ばされた。

小田原城とういろう博物館も面白かった。お城のレクチャーや、日本と中国との繋がりの深さ、歴史上の人物の登場にワクワクした。

工業や環境問題にしても歴史や現代社会にしても、教員自身が興味をもち、今回のように直接見聞していくことが大切だと改めて思った。

千葉製油所・東京港海事施設を見学して

八王子市立高井小学校 渡辺 大介

コスモ石油千葉製油所では、敷地内に所せましと並ぶ巨大な蒸留塔やタンクに目を奪われた。講義や見学を通して、原油を無駄なく石油製品に変える技術力や、働く人々の安全や環境保全に対する高い意識を窺い知ることができた。

栗林商船では、日本の貿易量の9割以上は船が運んでいることを知り、海運によって日本の衣・職・住が支えられていることを実感した。株式会社宇徳では、大井ふ頭にあるコンテナターミナルを見学した。巨大なガントリークレーンが早く正確にコンテナを運ぶ場面は圧巻であった。日本の生命線といっても過言ではない「石油と海運」を、今後どのように授業で扱っていくかをよく考え、今回学んだことを子供たちに還元していきたい。